

自然に起こること、遊び心
グルマーイについての話
バースデーブリス(誕生日の至福)を祝って

グルマーイの話 1
ヴァニ・アグラワル

それは 1990 年の 1 月でした。昼前の美しいグルデーヴ・シッダ・ピートゥには、そよ風が吹いていました。グルマーイがダルシャンをしている中庭には、完全な静けさがありました。

私はダルシャンの手伝いをするセーヴァーをささげていました。ちょうどダルシャンが終ろうという時、あるセーヴァイトが私に、インド中央政府の大臣がアーシュラムを訪れると私に告げました。彼はあと 5 分で到着し、グルマーイに会いたいとのことでした。

私はそのことをグルマーイに知らせました。グルマーイはうなずき、大臣が到着した時の花輪を用意するよう私に言いました。私は花輪を探しに行きましたが、見つかりませんでした。私は中庭に戻り、グルマーイに花輪がなかったことを告げました。

すぐさまグルマーイはダルシャンの籠の中のガジャラ——短い糸に通された香りのよいジャスミンの花——を指さしました。これらのガジャラは信奉者から数分前にささげられたものでした。グルマーイは私に、それらをつなげて花輪を作るよう言いました。

私はグルマーイの椅子の脇に座り、一心にガジャラをつなげ始めました。注意深くガジャラをつなげながら見上げると、そこに大臣がグルマーイのダルシャンを受けようと前に進み出ていたのです！ 彼はひざまずき、恭しくグルマーイにプラナムをささげました。彼が頭を上げた時、グルマーイは私を見て、ヒンディー語で「マラ」——花輪——と言いました。グルマーイは私に、大臣の首に掛けるよう指示したのです。

私はガジャラを完全に結び終わってはいませんでした。でもとりあえず立ち上がり、花輪を彼の首に掛けました。すると掛けた途端、花輪の前側が離れてしまいました。大臣の首には、両側に糸に通した花が2本、後ろはつながっていましたが前は開いて下がったのです。

グルマーイは、その途端ほほ笑み、大臣に言いました。「ハワイではこういうふうに入客を迎えるのですよ」

大臣はこれを聞き、とても嬉しそうでした。そしてハワイの伝統的な方法で歓迎されて光栄だと言いました。

この驚くべきやりとりを見て、私は畏敬の念でいっぱいになりました。グルマーイは、気まづくもなり得る状況を、気持ちをととても明るく高揚させるものに変えたのです。

その後、私はグルマーイが伝統的なハワイ式と言及したことについて不思議に思いました。なぜなら私が知っていたハワイの花輪のレイは、インドの花輪のマラと同じく輪に結ばれていたからです。するとある日、私はマイレ・レイと呼ばれると

でも特別なレイの写真を目にしました。それは記念すべき状況にだけ使われるもので、特に尊重すべき賓客に敬意を表するために与えられるものでした。そのレイは、私が大臣に掛けたジャスミンのように前が開いていたのです！ 私は再び畏敬の念に打たれました。グルマーイは、ダルシャンに来た大臣をもてなすまさにぴったりの方法を知っていたのです。

グルマーイの話 2 スワーミ・アカンダーナンダ

2004年2月のある日、私はアヌグラハの下のロビーでセーヴァイトのグループと共にグルマーイと懇談をしていました。私は、人々がグルマーイの言ったことを正確に覚えて十分に理解できるように、いかに聞く能力を向上させるかについてのアイデアをグルマーイに話しました。

グルマーイはほほ笑んで、私は話——特にグルマーイの話——を聞く時、うなずいて、「ああ、そうです！」とすぐに言うと言いました。私が物事を素早く理解しているように見えて、実はそうではないかもしれないということです！ グルマーイは、自分の教えが人々のどこに着地しているかを見るのが好きなので、そのために少しゆっくり話し、話したことを人々が理解するのを待ち、理解したことを本人が確認し、再確認するように言っていると説明しました。

グルマーイは、そこにいたセーヴァイトの一人にさらに説明することを求めました。そのセーヴァイトは、私のこの傾向についてグルマーイが彼女と話していたと告げ、その時に浮かんだイメージは頭上を飛ぶジェット機だったと言いました。

グルマーイに促されて、そのセーヴァイトは私がグルマーイの話を聞いている様子表現豊かに演じてみせました。セーヴァイトは、あたかも空の飛行機を見上げているかのように上を向き、「スワーミ・ジがビューンと飛んでいく。おお、何と素晴らしいアイデア！ ビューン、すごい計画だ！ ビューン、素晴らしい考えだ！ 一つ一つのビューンは、それぞれの計画やアイデアに対するスワーミ・ジの即座の反応です。でも、彼はこうした計画やアイデアが自分の中に着地するのを待ちません」と示して見せました。

このセーヴァイトの、私がグルマーイの話を聞く時のそっくりな物まねを誰もが笑いました。そして私も笑いました。私は自分の傾向を認識し、グルマーイがそれに気づかせてくれたことに感謝しました。

数週間後、私はムクターナンダ・マンディルでまたグルマーイに会いました。「スワーミ・ジ！」と、グルマーイは目を輝かせて言いました。「あなたに贈り物があります」。グルマーイは、この贈り物が私に聞くこととアイデアを着地させることを思い出させるだろうと言いました。

そしてグルマーイは、そこにいたセーヴァイトの一人に前に来るよう言いました。セーヴァイトの手には、ぴかぴかの青と白の747型ジェット機のおもちゃがありました。私たちは皆、笑いました。そして私は、グルマーイからのこのプラサードを喜んで受け取りました。

私はそれ以来そのジェット機のおもちゃをプージャーに置いて、グルマーイが話している時には意識を向け、注意深く聞き、話したことを熟考し、グルマーイの教

えがどこに着地するかを見いだすことを思い出すものとしています。この飛行機を見るたびに、私は内側に感謝の念の高まりを感じます。

グルマーイのプラサードは、私が修行すべきことを見事に表す象徴です。そして私にとってそれは、グルマーイが軽やかな心と楽しさ、そして忘れ難い方法で教える姿を美しく表しています。



© 2017 SYDA Foundation. 著作権所有。